

## 新井白石の古代観と神道観

竹岡, 勝也

<https://doi.org/10.15017/2344422>

---

出版情報 : 史淵. 8, pp.31-52, 1933-10-31. 九州帝国大学法文学部  
バージョン :  
権利関係 :

## 新井白石の古代觀と神道觀

竹 岡 勝 也

新井白石は佐久間洞巖に與ふる書に、和漢問答に就て、次の如く語つて居る。

和漢問答とか申し候て、跡部宮内入道晦翁作の、神道の儒道にまさり、古の堯舜以來あさましきよしの事ども書つゞけられ候もの御覽候か。老朽も當春始めて見候。右申候毗沙門天と同じやうの事にて候。惣じて三四年以來めづらしき學文の道どもかぞへ見候へば五六派、唯々皆門戸をたてられ候て、ほめはやし候事に候。周道衰候時に處士横議し、こゝにおゐて諸子百家の學候を、漢世董仲舒の功にて聖道をたつとび候事になり候と承候云々。

和漢問答はこゝには跡部宮内入道晦翁作とあるが、これは跡部光海の門人伴部安崇の手になるものであつて、主として護國一派が山崎闇齋の神道を攻撃する事に刺戟され、和漢の比較を試みて「天地開けはじまりしより久堅のけふに至るまで、天地あらためかはることなきはひとり大和の國也」と、

大に我國の「萬國にすぐれ」たる所以を主張したものであつた。この意味に於て一面國學の勃興を刺戟し、儒者の運動に胚胎された復古主義、日本主義の精神を、國學に傳達すると云ふ特殊の地位に置かれる事を見るのであるが、この伴部安崇と時を同じくして、一世の碩學と謳はれ、殊に我國古代研究に於ては一つの時期を劃すべき業績を残した新井白石が、以上の言葉を以て和漢問答を批評して居る事は兎に角注目されなければならない現象であつた。山來儒者の間に於ける古代研究は神道と密接な關係を持つものであつた。林羅山に於ては神佛習合の迷妄を指摘し、神道即王道である我國上代の神道を明かにする事が古代研究の重要な動機であり、山鹿素行に於ても同様の關係が見られると共に、こゝに於ては「神明の洋々たる、聖治の綿々たる、煥呼たる文物、赫呼たる武徳、以て天壤に比す可し」とする日本主義精神が一層活躍して來て居る事が見られるのであつた。兎に角その神道、その國體、その歴史に於て、新に我國の價值が顧られ、これに道義的根據を與へんとする運動が近世儒學の勃興に伴つて現れて來た。そしてこの運動は一面排佛の運動と相表裏をなして發展して來る。しかもその佛敎は中世の文化を支配したと云ふ意味に於て、彼等の主張は往々にして復古主義の形態を取り、價值の根源とも云はるべき古代の研究がこゝに導かれて來ると云ふ關係に置かれて居た。然るに初め儒者の手に行はれたこの古代研究は、日本主義精神の勃興に伴つて漸く儒者の手から獨立する傾向を示して來た。日本精神の獨立、國學の勃興は矢張りこの問題と關連して來る。そしてこの間から再び佐久間洞巖に與へた白石の書に従へば「そのうち齋齋一つの神道を建立候て今も其門流よほど

「繁昌とか申す事に候」と云はれる現象も現れ、その他所謂俗神道として國學者に批判されなければならなかつた雑多な神道説が現れて來た。白石が「惣じて三四年以來めづらしき學文云々」と稱し、「周道衰候時」の現象にこれが比較されなければならなかつた一つの關係は、かくして導かれて來たと云はれる事も出来るであらう。

兎に角この時代の古代研究に於て最も著しい業績を残して居る白石は、その古代研究の態度に於て必ずしも以上の風潮に屬する事は出来なかつた。従つてその批判は山崎闇齋に及び、伴部安崇に及んで來たのであつたが、然らばその晩年殆んどこれに没頭して居る彼の古代研究は如何なる關係に依つて導かれて來たものであるが、こゝに顧られなければならない一つの問題がある。

## 二

白石は古史通凡例に「凡此書専ら舊事本紀、古事記、日本書紀を以て本據とす」と稱し、また「凡諸家の書おの／＼其説をなす者すくならず。稱して異書秘籍といふものも既に多し。これを舊事本紀、古事記、日本書紀等に參考して其徴とすべきものなきは一切に採用ひず。これはいにしへにいふ所の蕪辭異端徒に篇籍を穢すが故也」と語つて居る。即ち彼は古代研究を行ふに當つて先づ典籍の批判を行ひ、かくして朝廷の實録であるを以て舊事本紀、古事記、日本書紀の三書が選擇せられ、神道五部書を初め異書秘籍の類は徒に篇籍を穢すものとして、寧ろその研究から除外された。この事は

一面伊勢、吉田、或は神佛習合の神道等、中世以降の一切の神道説を否定する事を意味するものであつた。或は異端、小説、敷衍、妖妄の言と稱せられ、或は老に出でざれば佛に入ると稱せられる等、是等の類は以て古代研究の資料とするに足らないのみならず、古代史を究明する事に依つて、「排斥を待ずして亦自ら滅盡きぬ」べき性質のものでなければならなかつた。兎に角彼は中世以降に於ける神道説の拘束からこれを解放する事に依つて、古代研究を新なる段階に導いた。併しながら彼はその研究を進めるに當つて矢張りしばしば神の問題に遭遇しなければならぬ場合があつた。殊に彼の古代研究は主として神代史の解釋にかゝるものであつた。こゝには八百萬の神々が存在すると共に、またしばしば神々の祭祀に就て語られて居る。古代研究の態度を決定するに當つて、先づ第一に擡頭して來るものは神とは何であるかの問題であつた。こゝに古史通冒頭に於ける「神とは人也。我國の俗凡其尊ぶ所の人を稱して加美といふ」と云ふ言葉が現れて來る。即ち國常立尊は常國に立給ひし御事の意味であつて、その常國は常陸國に比定せられ、天御中主尊はまた那珂國の君としてその歴史性が主張される。この解釋は闇齋派の神道等が行はれて居た當時の社會に於ては、極めて大膽なものであつたに相違ない。またこの解釋が主張される事に依つて「希夷視聽之外。氣氤氣象之中。虚而有靈。一而無體」と稱せられた國常立尊、また「國常立尊とは無形の形、無名の名、此を虚無大元尊神と名づく」と稱せられ、中世神道の王座に位した國常立尊は、自らその神道的な尊嚴を失はなければならぬものであつた。そして是等の神々を實在の人とする神代史がこゝに展開されて來るのである。

が、然らば彼は嘗て朝廷に依つて祭られた三千一百三十二座、その他一式外の神はあげてかぞふべからず」と云はれるその神々を如何に解釋して居るのであるか。こゝには神と人との關係に就て、再び顧られなければならぬ問題がある。即ち神は人であるが、同時にそれはその尊ぶ所の人を稱する言葉であつた。東雅には更にこれを説明して「ヒトとは靈の止る所といふが如し。さらば惟人萬物之靈などいふ事に其義自ら合ひぬるにぞあるべき。其神聖の徳あるをば尊び尙びてカミといひし事は前にしるせり云々」と云つて居る。人とは即ち萬物の中にあつて靈あるものゝ意味であり、その人の中にあつて特に神聖なものを尊んで神と呼んだ。神代の神々は即ちそれであつた。これを近世の例に求めるならば、徳川家康は天下一統の功績顯著なるものあつたために大神として祭られた。家光もその望みを抱いたが、これに價ひする功績なかつたために、その望みは遂に實現される事が出来なかつた。かくしてこゝには更に「古の人法を以て民に施せしと、死を以て事を勤しと、勞を以て國を定しと、大なる災を禦ぎしと、大なる患をよく捍ぎしとを祭らる」「本朝のいにしへ人を祭りて神となされし事、これらの功德ありし人々也」と、詳細な解説が加へられて居るのであつた。この解釋に従ふならば、少く共神代の神々は、人ではあるがそれは神聖の徳あり、大なる功績ある事に依つて神として祭られた人であつた。併しながら神として尊敬された人が、神として祭られ、しかもその祭祀が後世に逆意義を保つためには、更に一つの説明が加へられなければならないであらう。即ちそれは神靈の問題であつて、同時に人間の靈魂の問題となつて來る。白石は矢張りこの問題に注目した。彼は鬼神論

及び祭祀考に於て、極めて詳細に儒教の靈魂觀を檢討して居る。そして彼の靈魂觀はこれに依つて導かれて來て居る事が見られるのであるが、鬼神論に依ればそれは次の如く語らるべきものであつた。

彼是を通じて考るに、人の生ると死るとは、陰陽二つの氣の集ると散るとの二つにして、集れば人と成、散ては又鬼神となる。其魄の地に歸るゆへに鬼と名附け、其魂は、天に昇りゆくは神の謂なれば、故に神と名附ぬ。是集れる氣もと天地の氣なるがゆへに、散ては又天地に歸る。歸るがゆへに合て魂をも魄をもあはせてかく云ふ事にて是を人鬼とも名附事、其義前に云ふが如し云々。

即ち天地の氣集る事に依つて魂魄となり、魂魄散する事に依つて鬼神となる。集ると散るとの相違はあるが、それは要するに陰陽二氣の變通であつて、この意味に於て魂魄と鬼神とは極めて密接な關係に置かれるものでなければならなかつた。しかも天地の氣は互ひに相感する事が出来るものであつて、この關係は鬼神と魂魄との間に於ても見られ、その結果は人間の精神に對する鬼神の感應、中にもその氣を同じくする子孫の精神に對する感應として現れて來る。この關係はまた魂魄は死後尙鬼神として存在し、永く人間の精神に感應する作用を繼續すると云ふ言葉を以て置き換へる事も許されるであらう。しかもその魂魄にはまた次の如き場合もあり得るのであつた。即ち「或は勇壯（在りて）の人戰陣に臨て戦ひ死し、或は暴惡の人刑戮に遭て誅し殺され、或は自刎自縊、或怨恨を抱てまげて殺され、或は暴疾にあふて忽に死せる、或は婦女の深く怨み妬を含める、或は僧道士の務めて精神を養へる、彼

富貴權勢の人々の強死せる」と云ふが如き場合であつて、この時には死後猶魂魄はその氣散ずる事が出来ないで沈魂滞魄として天地の間にあり、「或は妖をなし、怪をなし、或は厲をなし、疫をなす」作用を始めるのであつた。これを死靈と呼ぶならば、この死靈に對する生靈の存在もまた認められた。死は精神と形體との永遠の分離であるが、この分離はまた一時的な現象として生人の間に現れる事も出来る。そしてこの形體から遊離した精神が妖をなす事は、死靈の場合と同様であつて、かくして生靈、死靈、妖怪、變化の類が、矢張り彼に問題となつて來て居る事が見られるのであつた。

兎に角彼は人間の靈魂に對してかくの如き神秘的な作用を認めて居た。従つて死後その鬼神を祭る事の意義も認められて來るのであるが、その中であつて死後「天地の害氣に因りて災をなす」處の沈魂滞魄に對する祭祀、即ち「それをしておもむきよるべき所あらしむればその災おのづからやむべし云々」と云はれる祭祀が、我國に現れて來るのは中葉以降の事であつて、古代に於ては未だこれを見る事が出来なかつた。即ち「本朝のいにしへ人を祭りて神となされし事、これらの功德ありし人々也」であつて、しかもその祭祀に就ては

(註五)  
本朝のいにしへも、およそ神を祭らるゝには必ずその神の後をして祭らしめらる。かるがゆゑに

其氏神といひ、その祭つかさどる人を氏人とも、氏子とも申せし也

と語られて居る。

「神とは人なり」と云ふ白石の言葉は、古代神々の歴史性を主張した言葉ではあつたが、靈魂に對

する以上の解釋を伴ふ事に依つて、再び神はその宗教性を明瞭にして來る。その作用は死に依つて停止する事なく、祭祀の對象として永くその存在を繼續する事の出來る人間であつた。しかもこゝには「神至て明なれども形を結ぶ時は明かならず」と云ふ言葉も語られて居る。即ち靈魂は死に依つていよく「その神明かなり」と云はれる性質を示して來るのであつた。國常立尊はかくの如き意味の人間であり、神代の神々は、かくの如き性質を伴ふ事に依つて、初めて神々として祭られる事が出來た。神と云ふ言葉は「我國の俗凡其尊ぶ所の人を稱して加美といふ」と稱せられ、また「今字を假用ふるに至りて神としりし上とするす等の別は出來れり」と稱せられる等、廣く上長を尊ぶ場合の言葉として使用された事も認められて居る。併しながらそれが神代の神々として現れて來る場合には、そこには矢張り以上の宗教性に就て、閑却される事の出來ない問題が存在した。

兎に角白石はかくの如き意味の神々の存在を認めて居た。しかも暫らく「神とは人なり」と云ふ白石の言葉から脱却して、一般に「祭られるもの」の意味に於て神なる言葉を使用する事が許されるならば、白石は更に多くの神々の發生を古代に於て認めて居る事も見られるのであつた。例へば諸冊二神が國土を生み終つて後山川草木の神々を生むと云ふ箇條を解釋して「此等の神を祀られし事此時より始めて、又其祀を掌れる職をわかち命ぜられしをいふなるべし」と稱し、更にその解釋に次の如き説明を加へて居る。

(註六)  
山川草木の國土における、なほ人の形體毛髮あるが如く、其神あるは亦なほ人の精神あるがごと

し。人既に生れぬるに及びては精神形體皆備らずといふものなし。前日人を生み終りて後、また今精神形體を生むといはむ、其理あるべしとも思はれず。舊事紀、古事記に、山川草木等の神を生むと見へしは、此葦原中國の地にしてこれらの祭典此時より始めりと云の義とこそ見へたれ。

即ち山川草木國土のその神あるは尙人間に精神あるが如きものであつて、同時にその神は山川草木國土の形體と、その發生の時を同じくしなければならぬ。従つてこゝに是等の神々を生むとあるは、是等の神々に對する祭祀の起元を意味するものであるとする解釋である。その解釋の當否は暫く別として、兎に角この解釋に従ふならば、山川草木國土は、神代の昔に於て、矢張り祭られる事に於て神である事が出來た。その他「これら祭祀の典ひとり異朝の先王の法のみにあらず、我朝のいにしへ朝家に行はれしところ悉くみなこれに同じ」と稱して、禮の祭祀を擧げ「天地、<sup>(註九)</sup>宗廟、社稷、日月、星辰、山川、丘陵の神をはじめとして、門行戸竈の神に至る迄、およそ大祀、中祀、小祀、式にみえし所三千一百三十二座、その餘式外の神はあげてかぞふべからず。さればみづから我國を稱して神國とも申せしとや」と、我國の神々に及んで居る等、「神は人なり」と云ふ彼の言葉は、必ずしも古代神々全般に適用せらるべきものではなかつた事を示して居る。

かくの如く彼の古代史研究に適用された「神とは人なり」と云ふ言葉は、必ずしも祭祀の對象としての神々の存在を否定する事を意味するものではなかつた。併しながらその神々が祭祀の對象とされ

る所以は、「天(註十)にしては神と云、地にしては祇と云、人にしは鬼と云ふ由、周禮には見へたり。其名異れども誠は陰陽二つの氣靈なれば、通じては是を鬼神とも言也」と云ふ解釋が適用されるならば、それは専ら鬼神である事にかゝつて居る。従つて彼が云ふ處の神道とは、要するに天地の氣靈である鬼神に奉仕する事を意味するものに他ならなかつた。更にこの關係に立ち入つて見るならば「徳(註十一)あるの神は天地の和氣に附て民の利を興し、鬼の厲をなす事は天地の害氣に因りて災を施す」。そして「人氣中に和ぐ時は天地の氣もおのづから上下に相和ぎ、人氣和せざれば天地の氣も又おのづから相やはらがす」であつて、先づ民を化し、人の氣を和げ、然る後に鬼神を祭つてその冥助を求めめる事が彼の神道の極致であつた。同時にこれは「明にはすなはち禮樂あり、幽にはすなはち鬼神あり」と云ふ禮記の言葉に對する彼の解説であると見られる事も出来るものであつた。

白石に取つて神道は鬼神に仕へる事以外の意味を持つ事が出来なかつた。そして鬼神に仕へる事は、福を招ぎ、厲を避ける意味に於て、固より閑却される事の出来ない問題であつたが、同時に彼は「我國(註十二)稱して神國といふといへども、祭祀祈禱之方のごとき禮樂政教には施す可らず」と稱し、また「神道をもて教を設くといふがごときも、常の道とし教とする所のごときをいひしとも見へず。されば名づけて神道とはいひつらめ」と云ふ等、神道の意義を局限して、こゝに我國独自の道を求め、或はその道を以て先王の道と對立し、況んやこれを以て先王の道にも優るとするが如き見解には反對しなければならなかつた。同時に當時儒者、神道家の間に發展して來て居る神儒合一の運動の如きも、

必ずしも彼の承認する處とはならなかつた。寧ろそこには和漢問答が直接の目標とした護園一派の神道觀と相通するものが見られるのであつて、従つて古代研究に於ける彼の態度にもまた自ら一部の儒者、神道家、及び國學者との對立が現れて來なければならなかつた。

- 一、御鎮座本紀。
- 二、神道由來記。
- 三、祭祀考。
- 四、鬼神論。
- 五、祭祀考。
- 六、鬼神論。
- 七、古史通。
- 八、古史通或問。
- 九、祭祀考。
- 十、鬼神論。
- 十一、祭祀考。
- 十二、古史通或問。

## 三

近世復古主義運動の基く處は、一つには歴史降下の思想にあつた。そして歴史降下の思想が彼等が求める價値の根源としての古代の認識、更にその神聖化と密接に關連して來る事は云ふ迄もない。儒者の間にはかくの如き意味に於て徂徠一派の古學派が擡頭し、古文辭を究める事に依つて、先王の道に對する新なる認識が提唱された。我國に就ては神道意識の發展がそれであつた。然るに白石の神道觀なるものは、必ずしもかくの如き意味に於て歴史降下の思想を根據付けるものではなかつた。明にはすなはち禮樂あり、幽にはすなはち鬼神ある事を以て儒道であるとするならば、神道は儒道の一部に屬すべきものであつて、儒道に代るべき意義を持つものではない。そして道の根源である古の聖代として擧げられるものは、先王の御代であつて、必ずしも我國古代ではなかつた。唯もし白石の神道觀から我國古代に對する特殊の認識を求めるとするならば、それは人である多くの神、換言すれば神に價ひする多くの神聖が神代の歴史に現れて來ると云ふ事であつた。こゝに神聖と稱するもの、必ずしも聖賢の類に限らなかつた事は「本朝のいにしへ人を祭りて神となされし事、これらの功德ありし人々也」と云はれて居る種類を見るも明かであるが、兎に角かくの如き神々が歴史的に活躍した時代とする事に於て、彼は矢張り古代に對する特殊の意識を示して居る事が見られるであらう。

彼はまた讀史餘論に、歴世の治亂興亡を論じ、「本朝天下の大勢九變して武家の代となり、武家の

代又五變して當代に及ぶ」と稱して居る。然らばこの歴史の推移を論ずるに當つて、彼は古代に如何なる地位を與へて居るか。こゝには矢張り顧らるべき問題があつた。彼は讀史餘論卷之二「上古征伐自天子出事」の條に、次の事を語つて居る。

神武日向より起り給ひ、筑紫の國を平げ、安藝の國に渡り、吉備の國を経て、つひに大和の國を討平げ、畝傍の山を開き、橿原宮にして帝位に即給ひしよりこのかた、九世凡五百六十九年が程は金革の事聞へず。上世民淳にして俗厚く、皇化の被ふ處おのづからおだやかなりしが故にぞ有べき云々。

また同じ箇條に、天武天皇が「天智の御よつぎ大友天皇にそむきて戦はせ給ひし事」を論じては、後代に及でも兩主御位をあらそひ給ひし事の始なれば、王徳やゝ衰て、風俗すでに澆しとこそ申べけれ

と稱し、田村麿の東夷平定の條には、

東夷皇化に順はざりし事は古へにも聞えしかど、此比の如くしきりに叛き亂れし事はいまだあらず。皇化すでに遠きに及ばざるしとや云ふべき

と云ひ、更にまた

後世のごとく文武其職を異にせられしが如くには非ず。これより後王綱紐をとぎ、柄臣權を專にせられしより、將帥の任ごとくに軽く、卿相の官に至れる人なく、且は文武の職、世官世族

となりしかば、朝廷の威日々に衰へ、功臣常に兵馬の權を司どり、天下の大勢一度變じて古にかへる事を得べからざる代とは成し也

と語つて居る。是等の言葉に依つて見れば、彼は古代を以て、民淳にして俗厚く、皇化は遠くおよび、皇化の及ぶ處おのづから穩かであつた時代と考へた事が見られるであらう。そしてこの時朝廷に於ては文武未だ分れず、その威甚だ盛んであつたが、後文武の官は分れ、將帥の任は輕視せられ、これに伴つて朝廷の威は日々に衰へ、も早古に歸る事の出來ない状態に移つて來たと云ふのである。

古代に對する彼の態度を窺ふべきものとしては更に遺文中に於ける彼の史論があつた。中に於ても注目せらるべきものは「孝徳改新詔」の條であつて、こゝに彼は上代に於ける我國社會制度の變遷を論じ、上世の制は三代封建の時の如く、中世以降は漢初封建郡縣の制を兼ね有するが如く、孝徳の世に及んで天下盡く變じて嬴秦郡縣の制となつてしまつた事を語つて居る。そしてこの孝徳の世の改革に對しては「天下皆稱其善焉」と云はれるのであるが、白石はこれに同意する事が出來なかつた。即ち白石に従へば嘗つては國郡縣邑の主皆神明の後であつた。そして各その祖神を祭る事に依つて、氏族は自らその出自を明かにしたが、帝の改革に依つてこの關係は斷たれ、「其後既亡。其祀既絶」と云はれなければならない状態に移つて來た。我國の神祠、祀典にあるもの凡そ三千一百三十二座、これ山林、川谷、丘陵の能く雲を出し、風雨をなすに非るよりは則ち古の神人であつて、皆民に功烈あるものである。然るに帝室の宗廟は置いて問はず、その神明の後であつてその祀を奉るもの獨り出

雲の國造あるのみに過ぎない。その餘に至つてはその祠はこれ何神、その後はこれ何人であるかを知るよしもない。かくの如き状態を見るに至つた理由として彼は次の如く語つて居るのであつた。

蓋此無他。帝變<sub>レ</sub>法之後。如<sub>レ</sub>其神明之後。雖<sub>レ</sub>承<sub>レ</sub>世官。其所<sub>レ</sub>食世祿。月給<sub>レ</sub>官廩而已。非<sub>レ</sub>若<sub>レ</sub>前代有<sub>レ</sub>食邑采地圭田之制也。况其衰門舊族。散往<sub>レ</sub>四方者。歲時欲<sub>レ</sub>祭<sub>レ</sub>其先。則其祠且不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>何在。又安有<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>禮之地哉。而其著在<sub>レ</sub>祀典者。官命<sub>レ</sub>有司。祭<sub>レ</sub>古之明神在其地。而無<sub>レ</sub>其後<sub>レ</sub>者也云々。

或はまた太古以來の姓氏、世に傳はるもの千百に十一に過ぎない事を痛嘆し、

蓋此無<sub>レ</sub>他。帝變<sub>レ</sub>法之後。舊門<sub>レ</sub>右姓。名爲<sub>レ</sub>世官世族。無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>尺土之奉。使<sub>レ</sub>其土無<sub>レ</sub>常君。其民無<sub>レ</sub>常主云々

と稱する等、田制考の序に従へば「及<sub>レ</sub>皇綱不<sub>レ</sub>振。班田始廢。亦猶<sub>レ</sub>周末諸侯去<sub>レ</sub>其典籍也。過<sub>レ</sub>此以往。古之良法美意。亦皆蕩然矣」と云はれる状態が、矢張りこの改革に依つて導かれて來た事を認め居るのであつて、その失政の甚しき、遂に次の言葉に價ひするものでなければならなかつた。

夫受<sub>レ</sub>命於天。爲<sub>レ</sub>生民之主。而絶<sub>レ</sub>人之後。奪<sub>レ</sub>人之利。天下之惡。莫<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>此矣。秦三世而亡<sub>レ</sub>其族。帝二世而滅<sub>レ</sub>其宗。皆反<sub>レ</sub>乎爾者也云々。

尙天武天皇を論ずるの條には「其弊則狗<sub>レ</sub>勢利亡<sub>レ</sub>禮敬。一如<sub>レ</sub>西北胡俗然。東方仁厚之風。於<sub>レ</sub>是變矣」とある等、以上の言葉を綜合して見るならば、彼は歴史の推移を通覽する場合に矢張り特殊

の意識を以て古代を眺めて居た事が窺はれるであらう。古代に對する彼の歴史的批判が果して妥當であるか否かは別として、兎に角彼は我國古代に於て東方仁厚の風を眺め、古の良法美意を賞し、しかもその時皇化は普く、皇威振ひ、天下長く治平を繼續した事を認めて居る。然るに大化の改革を一つの境として、古の良法美意は漸く失はれ、東方仁厚の風を改めたと稱する事に於て、彼は矢張り歴史降下の事實を承認するものでなければならなかつた。しかも當時歴史降下の思想と密接に關連して來て居る排佛の思想に對して、彼も決して無關心である事は出來なかつた。佐久間洞巖に與ふる書の中に、次の言葉を見る事が出来る。

御書付を見候へば、佛を御のがれ候に殊の外御力を用ひられ候事と見へ候。老拙とても佛氏よき事とは不<sub>レ</sub>存候勿論に候へども、口に出し候てよしあし申候事は仕りかね候事に候。此事倭佛阿世の事には無之候。實理今の勢手もつけられ候はぬ事に候……況や當時は天下御仕置の第一の大節目になり候。老拙なども毎年知行所家中寺證文をとり、公儀へ差上候へば、天下一民も佛に歸せず候ては此國に有べきやうもなくなり候。尙夫よりも重き事は、法皇様の御歸依と宮方門跡の御歸依との事は、ふつとならぬ勢に候へば、なまじひの事申候はことばの費にて、君子のあるまじき事と緘黙のみに候。これにより某史疑にも、佛氏の害、萬國の中我東方ほど大きなは無之候よししるし申候き。これはせめて後代の心得のためと如此候き云々。

即ち時勢を憚つて排佛を口にする事は避けたのであつたが、矢張り「佛氏の害萬國の中我東方ほど

大きなは無之」事實を認めて居たのであつた。

#### 四

かくの如く白石はこの時代の尙古思想、歴史降下の思想、或は排佛の思想に對して、必ずしも無關心である事は出来なかつた。従つて彼の古代研究は、是等の思想と密接に關連して來るこの時代の古代研究の中にあつて、必ずしも孤立した存在であるとは云はれないものがあつた。併しながら白石の場合に於て、以上の關係は未だ彼の古代研究を導く原動力として充分なものであるとは云はれなかつた。殊に白石は一面飽く迄儒者の立場に立脚し、如何に我國古代に於て良風美俗を認めるにしても、直ちにこれを以て我國の神道と稱し、その神道を以て我國の優越性を根據付けんとする一部の儒者、神道家、或は國學者の如き興奮をこれに捧げる事は出来なかつた。従つて彼の古代研究を理解するためには、更に異つた方面が顧られなければならないと云ふ關係を生じて來る。そしてこゝに問題を提示して來るものに彼の歴史觀があつた。この問題に就ては、嘗つて近世復古主義の源流を究めるに當つて觸れる處あつた。即ち「史は實に據て事を記して世の鑑戒を示すものなり」であつて、近世史學の發達を支配したこの言葉は、矢張り白石の古代研究に於ても重大な意味を持つものでなければならなかつた。實に據て事を記す、即ちそれが歴史であるためには嘗つて經驗された歴史的事象、換言すれば歴史的實在の認識が要求されなければならない。そしてこの認識は、世の鑑戒を示すと云ふ目的

に依つて、密接に現代と結び付く處のものでなければならなかつた。白石は矢張り以上の歴史觀に立脚して讀史餘論の著作を行つた。そして「本朝天下の大勢九變して、武家の代となり、武家の代又五變して當代に及ぶ」歴世の治亂興亡を論じたのであつたが、更にその研究が古代に導かれて來る事には、また一つの理由がなければならなかつた。即ち彼は古代の研究を進めるに當つて、しばし(註二)「太古の事既に滅びたり」と稱し、僅かに舊聞の及ぶ處と雖、存するが如く亡するが如く、夢見るが如く覺るが如く、「其聞へし所によりて其事を實にせむには、なほ風を繋ぎ、影を捕るごときにぞあるべき」と云はれなければならぬ状態にある事を嘆じて居る。しかも上古はその俗朴であつて、語る處を神にせんがためにしばし、荒唐不稽の説をなし、或は伊弉諾尊がその御子火の神を切りて段々にしたと云ひ、或は葦不合尊が「御姨(註三)にてしかも禰母にてましませし玉依姫を娶りて妃となし給ひし」と云ふ等、時には斷ずるに義を以てしなければならぬ場合も存在した。従つて後世古代を論ずるもの、詭辯競ひ起り、一に異端に出で、或は神道不測の言をなし、老に入らざれば佛に出づと云はれる状態にあつて、一層實に據つて事を記す事の困難を加へて居る。併しながら白石に従へば「神とは人なり」であつて、記紀の神話はその儘神代史を構成するものでなければならぬ。この夢の中に埋没された神代史を發掘する事が、白石の言葉に従へば、風を繋ぎ影を捕へる事に依つて、これに形を與へる事が、彼の古代史、就中神代史研究の根本動機となつた事が見られなければならないであらう。そして彼はこの發掘に備へるために一面古語の研究に没頭した。小瀬復庵に與ふる書には、

本朝古史を讀候に古言を解し候はずしては其義を得がたく候故、舊事、古事、日本紀等の歌詞よりして萬葉のことばの事ども、年來心をも潜め候事云々

と語られ、その苦心の結晶として殘されたものが即ち東雅であつた。更に彼が漢史倭人傳の研究を行つて居る事も注目されなければならぬであらう。この問題に關し、安積澹泊は白石の書に答へ、或は「魏志之文は如<sup>レ</sup>高論<sup>一</sup>疑を闕き異邦傳聞の謬にてあるらめと捨置候より外有之間敷候」と稱し、また「強て穿鑿を生候は、月中岩の日本紀、朝廷に焚棄候様に可<sup>レ</sup>罷成<sup>一</sup>候歟と恐惶をいだし、當館編集の史には一向手を付不<sup>レ</sup>申差置候」と語つて居るが、澹泊のかくの如き態度に對し白石は明かに不滿を表明して居る。即ち佐久間洞巖に與ふる書に、次の如き言葉を見出す事が出来るのであつた。

去年やらむも水戸の衆へ魏志に候倭國の國名はいかにとたづね候へば、傳聞の訛と見へ候て一所も存寄無之由に候き。老拙見候てはしれ候はぬは五六ヶ國も候か。不<sup>レ</sup>殘たしかに當時も候所々に候。此魏志は其時に彼國の使往來候て、見聞の及び候所をしるし候故に、里數戸數迄もたしかにて、けくこなたの今日が傳聞の訛にて、魏志は實錄に候。如<sup>レ</sup>此の所が古學の益ある事にて、第一の要に候云々。

<sup>(注三)</sup> 林羅山に日本考四卷の編纂が傳へられ、松下見林に異稱日本傳の編纂あつた事を思へば、白石が倭人傳に注目した事、驚くには當らないが、これを實錄として古史研究の範圍に取入れ、已に地名官名<sup>(注四)</sup>等の比定を試みて一見識を立て、居る事は、彼の古代研究の態度を窺ふ上に、看過すべからざる事柄

であつた。そしてかくの如き用意を以てするも、覺むるが如く夢見るが如き古代の歴史は、千百に十一もこれを明かにする事が出来ない事實を承認しなければならなかつた。こゝにも彼の態度の窺はれるものがある。即ち

(註五)

ましてや神代の事のごとき、たれかはよく其正しき所をばしるべき。其事のさだかならぬぞまことと神代の事にはあるなる。たゞその解かるべき事を解きて、とくべからざる事の如きは其疑を闕きなむこそ、よく古の書を讀むとはいふべけれ

と稱し、飽く迄詭辯相競ふ處の荒唐不稽の解釋を、その研究から排斥して居るのであつた。

一、古史通或問。

二、古史通。

三、羅山文集。

四、古史通或問。

五、古史通或問。

## 五

以上檢討する事に依つて、白石の古代研究が占める歴史的地位、及び古代研究發達の上に於ける彼の業績は略これを明かにする事が出来たであらう。その古代觀に於ては、往々にして時代の風潮に支

配されなければならぬ場合があつたにしても、兎に角彼は是迄神道の世界に屬した古代を歴史の世界に導く事に於て、換言すれば科學的方法をその研究に適用する事に於て、歴史的に紀念せらるべき多くの業績を残した事が認められなければならない。更にこれをこの時代の復古思想との關係に於て顧るならば、近世の頭初先づ儒者の間に擡頭して來たこの思想は、一つには山鹿素行や山崎闇齋に見られるが如き神道意識、或は日本主義精神の發達として導かれ、和漢問答の如きは、就中その著しきものであつたと云はれるであらう。然るにその古代研究が進められると共に、漸くその方法に就て反省を必要とする科學的精神が一方に現れて來た。契沖から春滿へと移つて來て居る國學に於ても、この精神は見られるのであるが、儒者の間に於てこれに著しき功績を残したものを求めるならば、矢張り先づ第一に新井白石が擧げられなければならない。かくの如き意味に於て、白石は和漢問答の著者と相提携し、また相對立して居る。そして各異つた意味に於て國學の勃興を刺戟し、古學の發達を促して居る事が見られなければならない。即ち國學の發達は、一面かくして分裂した二つの方向が、再び合流して來る關係に於て理解されなければならない性質を示して居るのであつた。

